

第6話 田山花袋の記した館林

今から87年ほど前の大正7年(1918年。第一次大戦のさなか、米騒動が発生し、原敬内閣が誕生した頃。)館林生まれの文豪、田山花袋が「一日の行楽」を発行しました。

この中に、自身の故郷・館林のまちなかを館林駅から実際に歩いた様子が登場します。

春の夕テバナシは、花袋の足跡をたどるまちなか散歩。花袋の目に、館林の街角はどう映ったのでしょうか。

“そこには、歴史家も承認した徳川家康の好い肖像が宝物になっている”

(善導寺；現在のキンカ堂付近)

“その付近は、一種なまめかしい空気に満たされている”

(青梅神社)

“ここから、躑躅のある花山に絶えず舟が出ているのである。確か、六銭(60)だと覚えている。”

(弁天の渡し場；現在の竹生島神社付近)

≫裏面へつづく

“絵のような赤い躑躅の色彩、それが私に何ともいえないロマンチックな感じを起させたのであった。”

(花山のつつじを船の上から見て)

“維新後、長い間荒れたままになっていた。三の丸、本丸、すべて草藪で、狐狸の巣窟となってしまうていた。”

(舟から降り、尾曳神社から館林城址を歩いて)

“私等の学んだ小学校は、大手のすぐ前にあるが、今では、機織工場になって、女工がしきりに機を織っていた。”

(現在の大手町周辺)

最後に、町の名物は「麦落雁に干饅頭(うどん)。この干饅頭は花山饅頭とって中中好(よい)と褒め称えた花袋。少年時代を過ごした町だっただけに、館林の町には思い入れが相当入っていたみたいですね。

(注1)：1銭=50円。当時の貨幣価値から、かけそば1杯(4銭)とあんぱん1個(2銭)が購入できる値段。

文 献：田山花袋「一日の行楽」

協 力：館林市教育委員会文化振興課

次回の夕テバナシは「町の思い出」。お楽しみに。

まち研

制作：まち研 問合せ：0276-72-1772(まちやサロン)

<http://www.tatebayashi.ne.jp/machiken/>